

第七章 熊野の筆

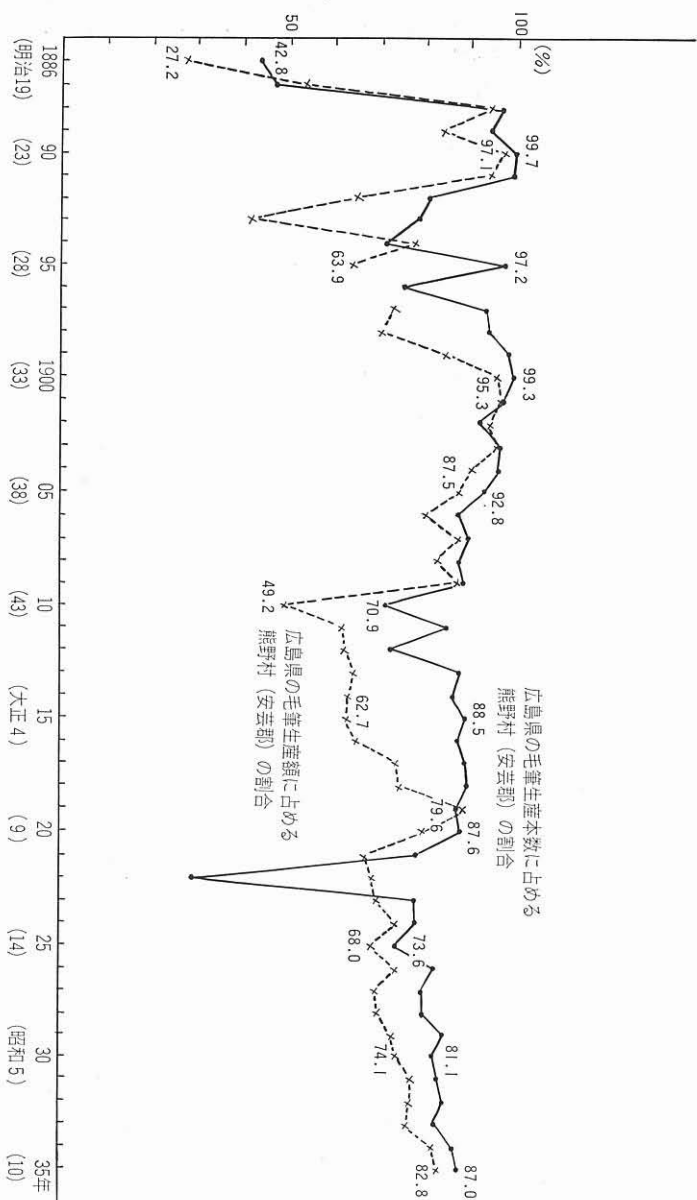


図7-1-26 熊野筆が広島県内の毛筆生産にしめる割合

『広島県勧業統計』より作成

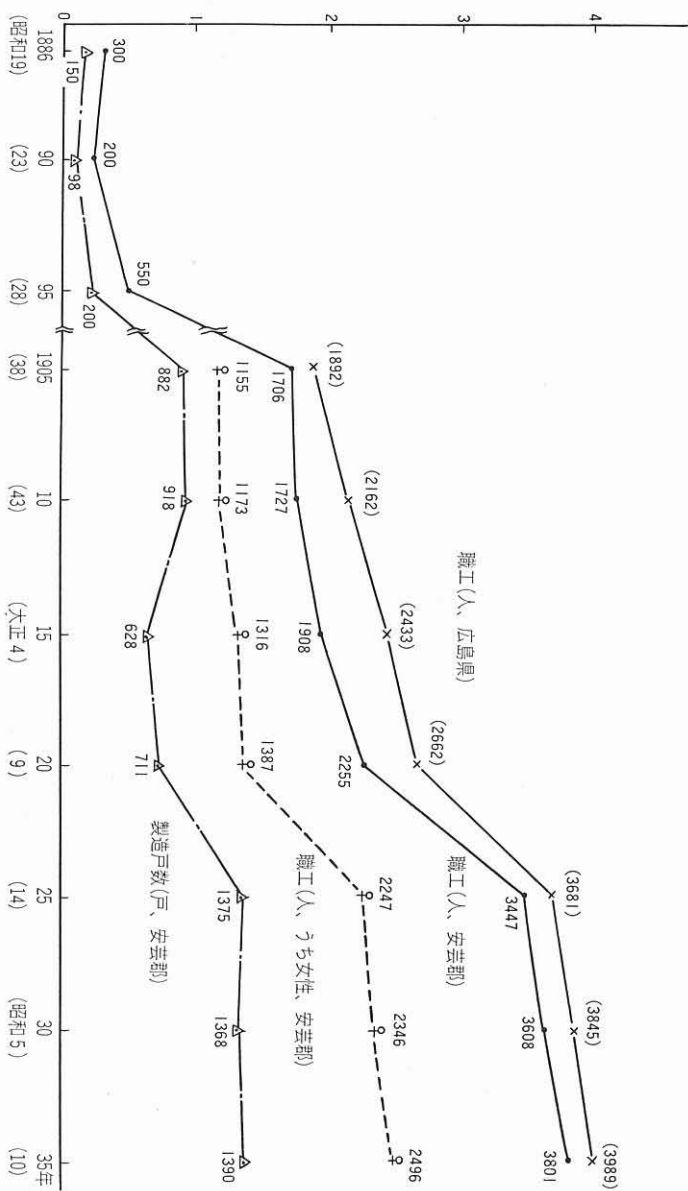


図7-1-27 熊野筆の製造戸数と職工数

『広島県勲業統計』各年より。ただし、明治28年は「熊野村工業年報」による

* 焼山村 (昭和6年呉市へ合併) を含む

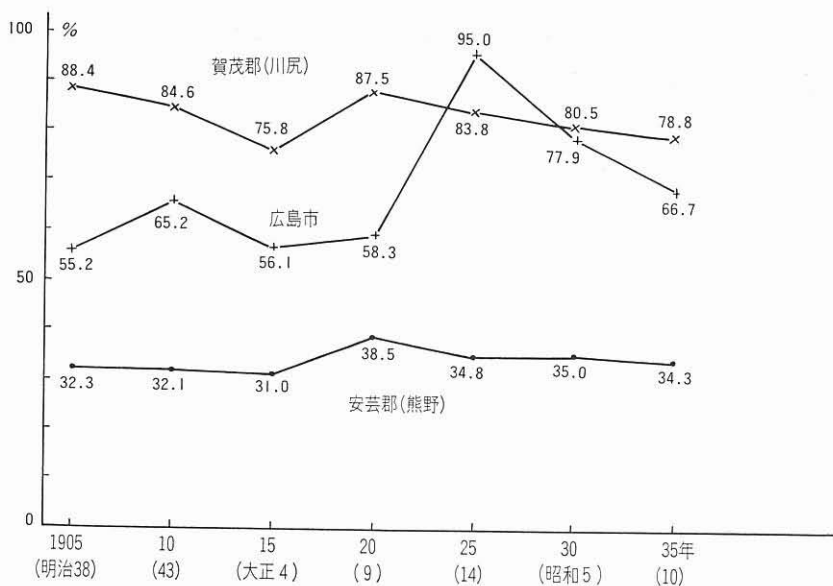


図7-1-28 毛筆製造における男子職工の割合

『広島県勧業統計』より

のしめる比重は、年によって大きく変動している。ごく大づかみにいえば、大体、六割ないし七割程度のシェアを占めていたといってもよいかも知れない。

職工数の推移

嘉永年間（一八四八—一八五三）

に熊野における筆の職工は一〇人、明治元年に同八〇人という記録が伝えられている。『広島県勧業統計表』によると、県内の毛筆生産にたずさわった人びとの推移は、図7-1-27に示されているとおりである。熊野村の毛筆製造戸数は、日清戦争（明治二十七八年）後から急速な増加をみせる。「熊野村統計報告事跡綴」によると明治三十一年（一八九八）には、六三〇戸、一〇五〇人とあり、このころから一〇〇〇人台の人々が筆造りにたずさわっていたことになる。その後、ほぼ順調な推移をたどる。

第一次世界大戦中の大正五年（一九一六）には、突発的に一三四九戸、三七一七人に増加するが、

表7-1-5 筆造りにおける職工数の推移

	広島			安芸			賀茂		計
	男	女	計	男	女	計	男	女	
1905年 (明治38)	58 (55.2)	47 (44.8)	105 (100.0)	551 (32.3)	1,155 (67.7)	1,706 (100.0)	69 (88.4)	9 (11.6)	78 (100.0)
1910年 (43)	150 (65.2)	80 (34.8)	230 (100.0)	554 (32.1)	1,173 (67.9)	1,727 (100.0)	170 (84.6)	31 (15.4)	201 (100.0)
1915年 (大正4)	235 (56.1)	184 (43.9)	419 (100.0)	592 (31.0)	1,316 (69.0)	1,908 (100.0)	50 (75.8)	16 (24.2)	66 (100.0)
1920年 (9)	141 (58.3)	101 (41.7)	242 (100.0)	868 (38.5)	1,387 (61.5)	2,255 (100.0)	140 (87.5)	20 (12.5)	160 (100.0)
1925年 (14)	57 (95.0)	3 (5.0)	60 (100.0)	1,200 (34.8)	2,247 (65.2)	3,447 (100.0)	145 (83.8)	28 (16.2)	173 (100.0)
1930年 (昭和5)	53 (77.9)	15 (22.1)	68 (100.0)	1,262 (35.0)	2,346 (65.0)	3,608 (100.0)	120 (80.5)	29 (19.5)	149 (100.0)
1935年 (10)	28 (66.7)	14 (33.3)	42 (100.0)	1,305 (34.3)	2,496 (65.7)	3,801 (100.0)	115 (78.8)	31 (21.2)	146 (100.0)

『広島県勸業統計』より

その後大正九年（一九二〇）まで大体七〇〇〇〜八〇〇〇戸、二〇〇〇人台が続く。大正十年には製造戸数が一二〇五戸と一〇〇〇戸の大台にのり（ただしこの年職工数は一七八〇人に減少）、翌大正十二年からは一二〇〇〇〜一四〇〇〇戸台に推移する一方で、職工数も三〇〇〇人台で、しだいに四〇〇〇人に近づく勢いをしめしている。

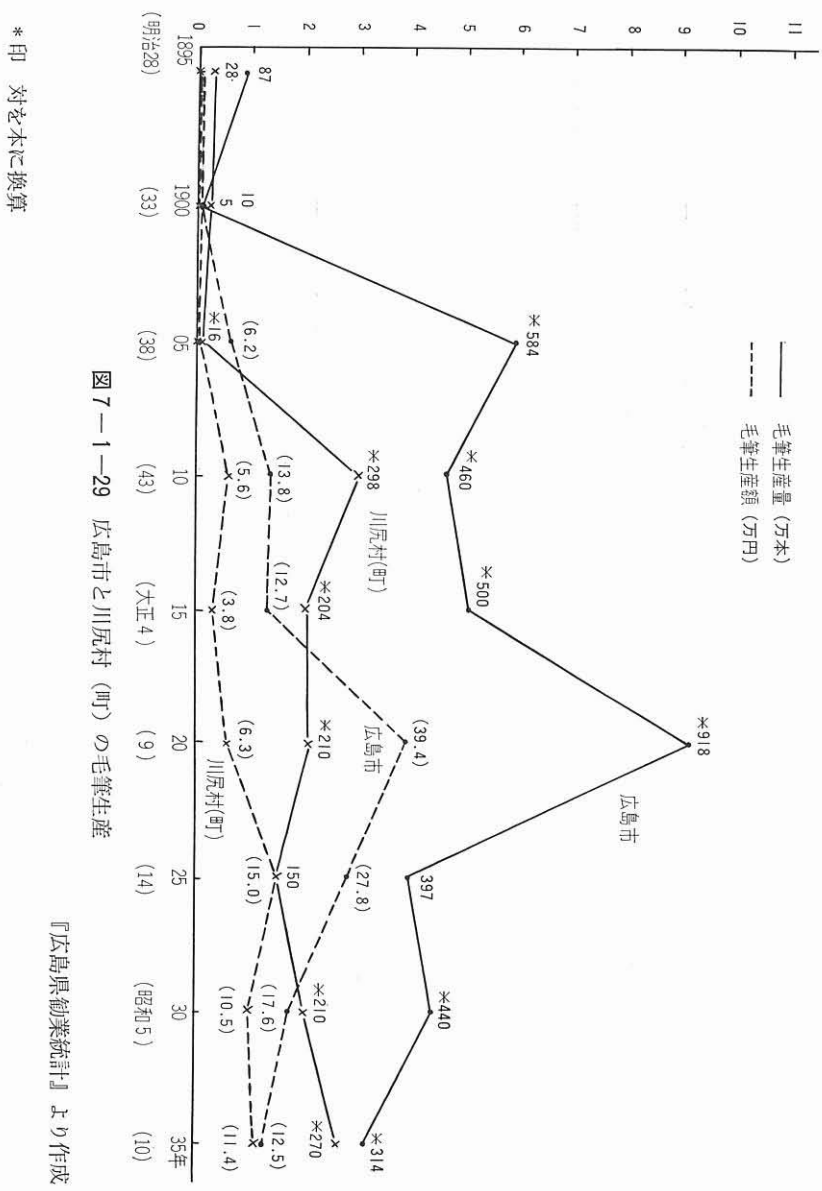
熊野の筆生産にたずさわる職工の数は、県内の職工総数のつねに圧倒的な部分を占めている（大体八割から九割五分）。これが、まず第一の特徴である。つぎに、一戸当たりの職工数をみると大体一人〜三人以内にとどまっている。さらに、職工のうち、熊野のばあい女性が多いことも大きな特徴である。大体三分の二以上は女性である。このように、熊野筆は、小規模な家内労働とくに女性労働によって造られてきたという点に、重要な特徴がみられる。県内外のその他の毛筆産地では、当時も戦後の現在においても、女性の職工の比重

はそれほど大きくはないとされている。まさに、「姉も妹も筆つくる」と唄われているように、熊野の筆づくりは、その大部分が、零細な家内工業、とりわけその女性労働によって、ささえられてきたといつてよいであろう。

県内の他産地の状況

熊野以外の県下の毛筆生産地は、図7-1-29によると、広島市ついで川尻村であった。広島市における毛筆の生産は、明治三十年代の末ごろから大正の中葉（大正十年）ころまでが、いちばん盛んであったようで、それ以降徐々に衰退していく。明治以降、広島市における毛筆生産の戸数は多くて三〇戸どまり、たいていは一〇戸以下である。職工数は最高四〇〇人までで、たいていの年は二〇〇人台どまり、生産量は多くても一〇〇〇万本までで、たいていは四〇〇〇～五〇〇〇万本程度、生産額は最高四〇万円を超えることなく、だいたい一〇～二〇万円台を推移している（表7-1-6も参照）。

これにたいして、賀茂郡（川尻村、同村は大年十一年町制施行、昭和三十一年に豊田郡へ移管）では、明治の末期ごろから毛筆造りが本格的に定着したもののように思われる。『広島県勧業統計』に川尻村の毛筆生産がはじめて現われるのは、明治二十五年（一八九二）である。同年六四戸（六六人）の生産者があり、一三万二〇〇〇本、三九六〇円の生産額が記録されている。広島市における毛筆の生産との対比でみると、当時の川尻筆の生産の規模は、生産戸数は一〇〇戸前後で広島市のそれよりはるかに多く、職工数は一〇〇～二〇〇人程度でほぼ同数である。また、生産量は、明治四十一年（一九〇八）の二五〇万対（五〇〇万本）を最高に、だいたい一〇〇～二〇〇万本台で、広島市のそれのたかだか半分程度であったものと思われる。さらに、生産額は、数万～十数万円の程度で、広島市のそれのおおむね半分程度にとどまっている。しかし、川尻村（町）における毛筆の生産は、広島市のばあいとはほぼ同じ明治三十年代末ごろから本格化したとみられるが、それ以降かなり安定した生産規模の推移がみら



『広島県勸業統計』より作成

毛筆生産

賀 茂 郡		そ の 他	
—	—		
		西城村 10,000 (0.3) 150 (2.9)	
本 285,167 (0.7)	円 4,678 (11.0)	世羅郡 8,000 (0.02) 90 (0.2)	
本 100,000 (0.4)	1,500 (2.8)	世羅郡 1,000 (0.003) 15 (0.03)	双三郡 10,000 (0.04) 70 (0.1)
(対) 82,130 (0.2)	3,860 (0.7)	深安郡 22,500 (0.05) 920 (0.2)	双三郡 1,500 (0.003) 30 (0.005)
(対) 1,494,300 (11.4)	56,567 (14.7)	深安郡 20,000 (0.2) 450 (0.1)	双三郡 2,700 (0.02) 102 (0.02)
(対) 1,021,320 (3.3)	38,986 (8.7)	安佐郡 2,000 (0.006) 60 (0.01)	双三郡 1,450 (0.004) 73 (0.01)
(対) 1,050,000 (2.3)	63,000 (2.8)	安佐郡 3,750 (0.008) 300 (0.01)	福山市 8,000 (0.01) 800 (0.03) 佐伯郡 300 (0.00) 24 (0.00)
本 1,500,000 (7.2)	150,000 (11.2)		福山市 19,000 (0.09) 1,140 (0.08)
(対) 1,050,000 (5.9)	105,000 (9.4)	尾道市 102,500 (0.6) 8,200 (0.7)	山縣郡 2,000 (0.01) 200 (0.01)
(対) 1,350,000 (6.0)	114,750 (8.2)		

『広島県勧業統計』

表7-1-6 広島県の

第一節 筆の歴史と熊野

	合 計		安 芸 郡		広 島 市	
1886年 (明治19)	本 350,440 (100.0)	円 2,204 (100.0)	本 150,000 (42.8)	円 600 (27.2)	本 200,400 (57.2)	円 1,604 (72.8)
1890年 (明治23)	本 3,010,000 (100.0)	5,150 (100.0)	本 3,000,000 (99.7)	5,000 (97.1)	—	—
1895年 (明治28)	本 41,314,167 (100.0)	42,440 (100.0)	本 40,145,000 (97.2)	27,160 (64.0)	本 876,000 (2.1)	10,512 (24.8)
1900年 (明治33)	本 25,420,400 (100.0)	53,176 (100.0)	本 25,250,000 (99.3)	50,700 (95.3)	本 59,400 (0.2)	891 (1.7)
1905年 (明治38)	(対) 41,948,130 (100.0)	533,874 (100.0)	(対) 38,922,000 (92.8)	467,064 (87.5)	(対) 2,920,000 (7.0)	62,000 (11.6)
1910年 (明治43)	(対) 13,119,738 (100.0)	383,994 (100.0)	(対) 9,302,738 (70.9)	188,875 (49.2)	(対) 2,300,000 (17.5)	138,000 (35.9)
1915年 (大正4)	(対) 30,662,370 (100.0)	447,123 (100.0)	(対) 27,137,600 (88.5)	280,504 (62.7)	(対) 250,000 (8.2)	127,500 (28.5)
1920年 (大正9)	(対) 45,567,110 (100.0)	2,250,217 (100.0)	(対) 39,915,060 (87.6)	1,792,093 (79.6)	(対) 4,590,000 (10.1)	394,000 (17.5)
1925年 (大正14)	本 20,764,771 (100.0)	1,342,895 (100.0)	本 15,273,200 (73.6)	913,075 (68.0)	本 3,972,571 (19.1)	278,000 (20.8)
1930年 (昭和5)	(対) 17,791,400 (100.0)	1,118,585 (100.0)	(対) 14,436,900 (81.1)	829,185 (74.1)	(対) 2,200,000 (12.4)	176,000 (15.7)
1935年 (昭和10)	(対) 22,566,200 (100.0)	1,403,607 (100.0)	(対) 19,641,400 (87.0)	1,162,873 (82.8)	(対) 1,574,800 (7.0)	125,984 (9.0)

第七章 熊野の筆

れるのが特徴である。そして、広島市における毛筆生産が衰退しはじめる大正末期からは、川尻の職工数は広島市のそれを凌駕する。

そのほかにも県内での毛筆の生産は、各地で散発的に行われていたもようである。たとえば、わずかずつではあるが、明治期には、西城村、世羅郡、双三郡、深安郡内にも記録がある。大正期以降には、さらに、安佐郡、尾道市、福山市、佐伯郡、呉市、山県郡内でも、その記録がみられる。しかしこれらの各地域は、いずれもごく少人数で、期間もせいぜい数年間しか記録が残されていない。

筆の生産高の推移

(単位万本、万円)

42年	43年	44年	45年	46年	47年	48年	49年	50年
3,270	3,850	3,920	4,020	4,550	4,420	4,360	4,470	3,515
130,800	173,250	235,200	261,300	318,500	309,400	327,000	357,600	386,650
6,230	6,460	6,500	5,040	5,190	4,920	4,820	5,170	4,380
74,760	77,520	104,000	90,720	103,800	113,160	120,500	155,100	140,160
9,500	10,310	10,420	9,060	9,740	9,340	9,180	9,640	7,895
205,560	250,770	339,200	352,020	422,300	422,560	447,500	512,700	526,810
141	153	154	134	144	138	136	143	118
225	274	371	385	462	462	489	561	576

資料出所 熊野筆事業協同組合

1-2

(万本、万円)

55	56	57	58	59	60
3,440	3,440	3,470	3,500	3,550	3,600
521,940	521,940	533,670	565,000	(60億円)	(65億円)
4,970	4,970	4,970	4,900	4,700	4,000
213,710	213,710	213,710	245,000	(26億円)	(28億円)
4,000	4,000	4,000	4,400	4,650	4,800
86,400	86,400	86,400	(14億円)	(18.6億円)	(20億円)
12,410	12,410	12,440	12,800	12,900	12,400
(82.2億円)	(82.2億円)	(83.3億円)	(95.0億円)	(104.6億円)	(113.0億円)
106.5	106.5	106.7	109.8	110.7	106.4
135.1	135.1	137.0	156.2	172.0	185.8

熊野筆事業協同組合調に基づき算出したもの

表 7-1-1 熊野

年度 項目		明治 元年	明治 16年	大正 4年	大正 15年	昭和 12年	22年	30年	40年	41年
毛筆	本数	15	140	4,200	4,330	6,400	1,500	2,730	3,000	3,270
	金額	1 ²	2 ¹	115	152	1,250	11,320	34,400	54,000	65,400
画筆	本数	—	—	—	—	—	—	3,150	3,735	5,970
	金額	—	—	—	—	—	—	22,900	37,350	77,610
合計	本数	15	140	4,200	4,330	6,400	1,500	5,880	6,735	9,240
	金額	1 ²	2 ¹	115	152	1,250	11,320	57,300	91,350	143,010
指数 (昭40 =100)	本数	—	2	62	64	95	22	87	100	137
	金額	—	—	—	—	1	12	62	100	150

表 7-1

	昭和 50	51	52	53	54
毛筆					
本数	4,200	3,800	3,700	3,740	3,820
金額	(38億円)	454,629	495,098	518,830	559,240
画筆					
本数	4,300	4,500	4,500	4,500	4,600
金額	172,000	(18億円)	184,500	193,500	197,800
化粧筆					
本数	3,150	3,500	3,500	3,500	4,000
金額	56,700	63,000	(7億円)	(7億円)	84,000
合計					
本数	11,650	11,800	11,700	11,740	12,420
金額	(60.8億円)	(69.7億円)	(74.9億円)	(78.2億円)	(84.1億円)
指数(昭50=100)					
本数	100.0	101.2	100.7	100.7	106.6
金額	100.0	114.6	123.1	128.6	138.3

() 内は概数を示す。昭和50年は上の表の数値と若干の差異がみられる。

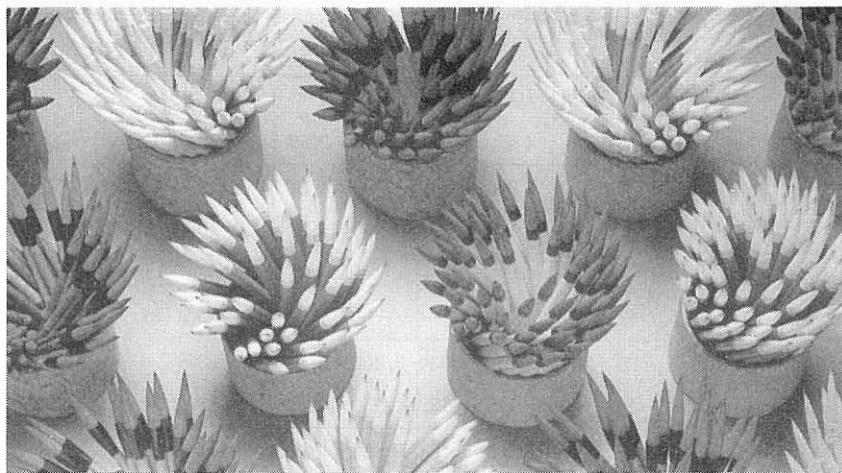


図7-1-11 毛筆完成品 「町勢要覧」より

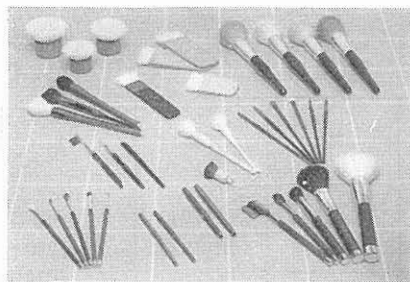


図7-1-13 化粧筆 「町勢要覧」より

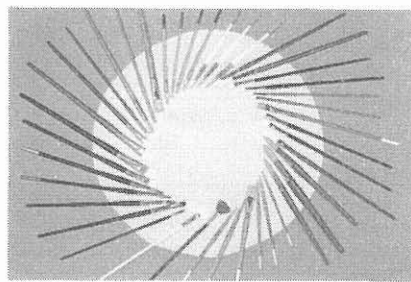


図7-1-12 画筆 「町勢要覧」より

らと思われるが、その詳細はあまり知られていない。組合の資料によれば、古くは、嘉永年間（一八四八～一八五三）に一〇〇〇本、明治元年（一八六八）に一五万本、明治十六年に一四〇万本の生産があったという。大正六・七年（一九一七・一八）のころ五千数百万本、昭和十一年が最高で七〇〇〇万本近くの毛筆が生産されている。筆毛の生産量は、大きな戦争の勃発した年に、急増しているように思われる。古老の話として伝えられるところによると、戦地へ直接筆を販売するために出かけた人々もあったというが、このこ

とは戦争と筆の生産の伸びとの相関関係を、示唆しているようでもある。

戦争経済がしだいにゆきづまり敗戦が近づくにつれて、筆の生産量は大きく落ち込み、終戦直後の昭和二十三年（一九四八）には一五〇〇万本程度にまで後退している。

戦後の国粋主義排除の傾向の中で、毛筆の生産は大きな困難をかかえて、しばらく呻吟の時期が続く。だが、その後、学校習字の復活といわゆる高度成長の波に乗って、熊野筆の生産は順調な推移をたどるようになる。しかし、高度成長が終わり、低成長の時期に入ると、毛筆人口の減少傾向と不況感に災いされて、また、低迷の時代をむかえ、今日にいたっている。中国筆との競合関係や円高問題もあり、熊野筆の今後は、必ずしも楽観を許さないものがある。

戦後、毛筆生産の低迷状況から脱出する手段として、画筆や化粧刷毛^{はけ}の生産が活発化していったが、これらの多くは、輸出に向けられているので円高問題は深刻である。

2 熊野村の行政資料による推移（明治期）

明治期における熊野筆の生産の状況は、熊野村の行政資料によってその様子をうかがうことができる。同村の統計調査表、工業年報、統計報告事跡によれば、その推移は、表7—1—

14のようであった。明治二十八年（一八九五）を除く同二十年代は大体数百万本、それ以降は四〇〇〇万本を最高とした数千万本の生産があったものである。日清戦争（明治二十七・二十八年）や、明治三十年代の日本の資本主義の成立期の景気情況などを受けて、熊野における筆作りも盛んになったのではないかと思われる。

第七章 熊野の筆

熊野村統計調査表 (明治21、22年)
 // 工業年表 (明治27~31年)
 // 統計報告事跡 (明治33~44年)
 // 輸出入統計表 (明治36年)

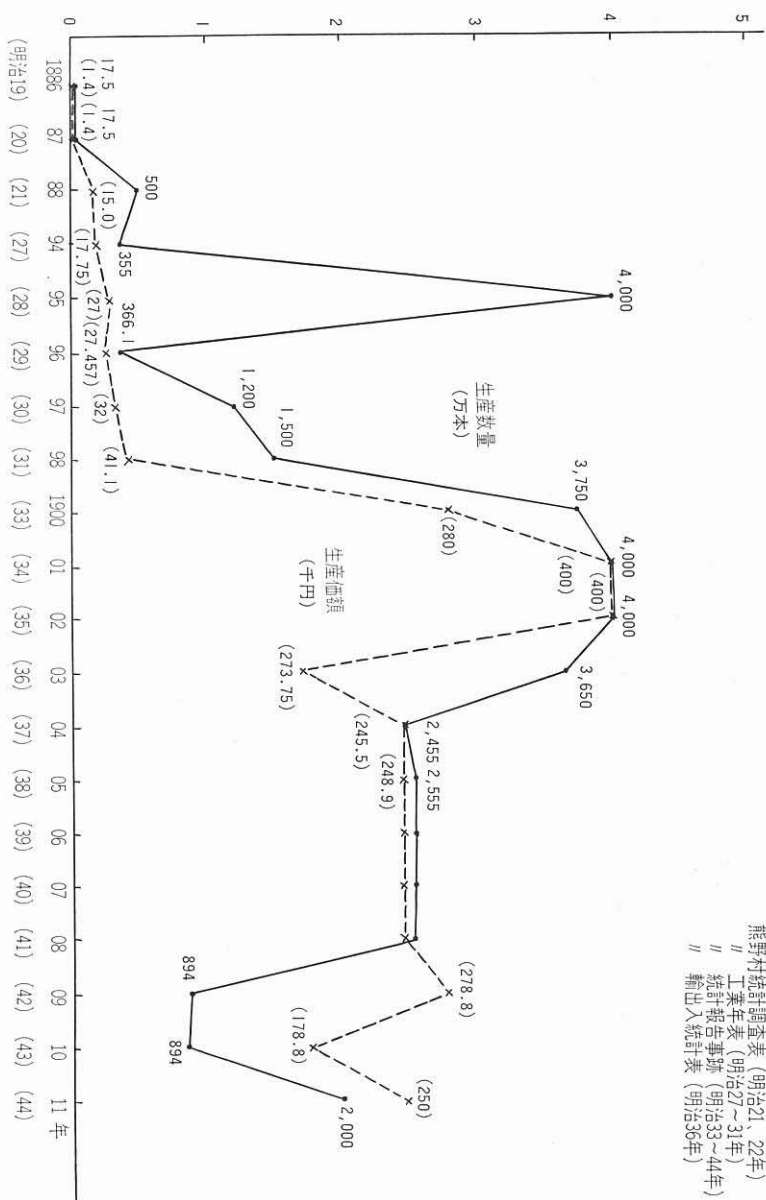


図7-1-14 熊野筆の生産状況

(表7-1-3より作成)

表 7-1-3 熊野筆の生産状況

第一節 筆の歴史と熊野

明治年	製造戸数	職 工	(男)	(女)	数 量	価 額
	人	人			万本	千円
19	凡 150	凡 300			17.5	凡 1.4
20	157	335			17.5	凡 1.4
21	157	335			500.0	15.0
27	180	350			355	17.75
28	200	550			4,000	27
29	400	600			* 366.1	27.457
30	450	不明			1,200	32
31	630	1,050			1,500	41.1
33	725	1,185	689	496	3,750	280
34	755	1,466	715	711	4,000	400
35	760	1,442	725	717	4,000	400
36					3,650	273.75
37	700	1,400	400	1,000	2,455	245.5
38	780	1,490			2,555	248.9
39	780	1,490	490	1,000	2,555	248.9
40	780	1,490	490	1,000	2,555	248.9
41	780	1,490	490	1,000	2,555	248.9
42	780	1,490	490	1,000	894	278.8
43	780	1,490	490	1,000	894	178.8
44	780	1,490	490	1,000	2,000	250

* 明治29年は、3,661万本か？

(資料) 熊野村統計調査表 (明治21年、同22年)

〃 工業年表 (明治27年～同31年)

〃 統計報告事跡 (明治33年～同44年)

〃 輸出入統計表 (明治36年)

第七章 熊野の筆

生産額も、二十年代の数万円から、最盛期の四〇万円位までの間で、推移していたことがわかる。

熊野筆事業組合や熊野村当局の資料によってもかなり明らかになるように、熊野における毛筆の生産は、江戸時代の末ごろからぼつぼつ始まり、明治に入ってから、とりわけわが国の資本主義が成立してゆく明治の中ごろにかけて、さかんになり、この地に定着していったものと思われる。ちなみに、当時の記録には次のようにある。

筆〔明治十九年（一八八六）〕

筆県下ニ製出スルモノハ日常所用ノ小筆及習字用ノ諸筆ニシテ其品位ハ概シテ下等物多シトス然レモ学事ノ進歩ニ連レ其需要年々多キヲ加フルモノム如シ乃左ニ掲クルモノハ本年ノ統計ニテ之ヲ前年ニ較レハ製造家五十戸職工五十一人ヲ増シ製品五万余其概価貳百円余ヲ加ヘタリ

産地	製造戸数	職工人員	製造高	概価高	販売先
広島	二二戸	二八人	二〇〇、四四〇本	一、六〇〇円	防長石州地方 並県内
安藝郡	一五〇	三〇〇	一五〇、〇〇〇	六〇〇	
熊野村	一七二	三二五	三五〇、四四〇	二、二〇四	
合計					

筆〔明治二十年（一八八七）〕

広島及安藝郡熊野村ニ於テ製造スル所ノ筆ハ其ノ製出高及概額トモ前年ト大差ナシ乃チ本年ノ産額概価ハ左ノ如シ〔以下省略〕

筆〔明治二十二年（一八八九）〕

筆ハ広島市及ヒ安藝郡熊野村ヨリ産ス而シテ本年ノ景況広島市ノ如キハ前年ヨリ製造稍増加シタレトモ熊野村ノ如キハ本年五月以降米価ノ騰貴セシニ拘ハラズ賃金依然トシテ低廉ナルヲ以テ他業ニ転セシ職工少カラス為メニ其産額大ニ減少ヲ来セリ〔以下省略〕

筆〔明治二十四年（一八九一）〕

筆ハ安藝郡熊野村ヨリ産出スルモノヲ佳良トシ其名聞ユ而シテ本年ノ産額左ノ如シ〔以下省略〕

以上、広島県勸業統計各年

これらの記録によれば、明治二十年前後の熊野における筆づくりは、「日常所用ノ小筆」や「習字用ノ諸筆」であり、「概シテ下等物」であったが、「学事ノ進歩」につれて、その需要も拡大して行つたとある。熊野筆の販売先は当初は「防長石州地方並県内」とあり、まだ比較的地域が限られている。つまり、筆づくりは、この当時は、それぞれ全国の各地で行なわれていたということであろう。

また、米価や賃金とのかねあいでは、手輕に「他業ニ転セシ職工」も少なくなかった。筆づくりの手工業的技術を持ったものであつても、市況等の事情によって比較的簡単に転業したり、また筆づくりに復帰したりすることが、くりかえされたのであろう。このようななかで、農業以外の他の産業との結びつきも希薄であり、地域的にも広島や呉などの周辺の経済発展から隔絶された状態のままにおかれた熊野が、筆づくりにとってはむしろ逆に幸いしたのではあるまいか。また、熊野の筆づくりは、後述のように、多くの女子労働によって支えられていたために、家内工業としての定着率がよく、産地としての熊野の地位の確立にこのことがあづかつて力があつたもののように思われる。かくして、熊野の筆はしだいに「佳良トシ其名聞ユ」というような状況を呈するように

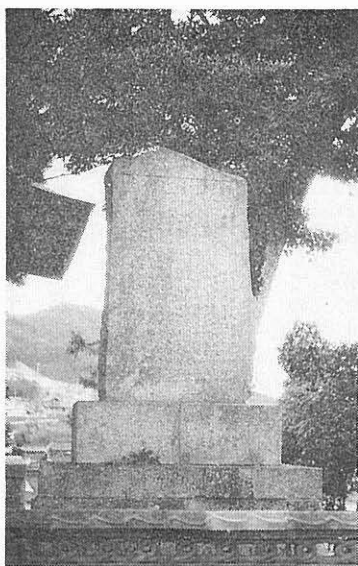


図7-1-15 静流隼田翁碑（明治31年仲春建之 呉地八幡神社内）

なっていたものと思われる。

明治三十年ごろ

その後の熊野筆の発展してゆく様子は次の記録によつ

てもうかがい知ることができる。

明治廿七年本村工業ノ景況ヲ通觀スルニ進退ノ狀況ハ概シテ進歩ノ狀態ヲ呈スルモ客年ヨリ著シキ變動ナシ漸次ニ販路ヲ廣スルニ依リ□□盛況ヲ觀ルアリ依テ当年ノ製作品ハ概價高一万八千円ニシテ昨年ヨリ増額千五百拾円ヲ見ルニア

リ各業ニ就キ其ノ景況ヲ叙スレハ左ノ如シ

〔中略〕

一毛筆ハ近來價下落ナリシカ客年ヨリ漸次ニ高價ノ觀アリ随テ工業者ヲ増加ス販路擴張シテ盛況ノ趣アリ

明治二十八年本村工業ノ景況ヲ通觀スルニ進退ノ狀況ハ概シテ進歩ノ狀ヲ呈セリ客年ヨリハ販路ヲ廣メ随分盛況ヲ觀ルアリ依テ当年ノ製作品ハ重ニ毛筆ニシテ其概價高二万七千円ニシテ昨年ヨリ増加額九千円ト認メリ各業ノ動キ其景況ヲ叙スレハ左ノ如シ

〔中略〕

一毛筆ハ近年價額モ騰貴シ随テ工業者ヲ増加セリ販路モ擴張シ盛況ヲ呈セリ以上ノ統計ヲ示ス事左ノ如シ〔以下、省略〕

以上、熊野村工業年報各年度

このような記録は、ほぼ同内容の文言を繰り返すかたちで、明治三十一年（一八九八）のものまで現存している。

このような傾向は、その後、日清戦争（明治二十七年—同二十八年）などを契機として、しだいに全面的なものとなっていく。「熊野村工業年報」の記述によれば、熊野筆の販路は、「広島市、九州、四国、山陰各国、大阪、



図7-1-17 片山仁一郎記念碑（明治42年8月建立 呉地区）



図7-1-16 梶山先生之碑（明治40年10月建立 榊山神社境内）

このころ図7-1-15、17の頌徳碑にみられるような人々の努力があったことは意義深い。

販路の拡大

熊野筆は、明治の十年代までは、その販路も比較的限定されたものであったようである。すなわち、その範囲は、「防長石州地方並県内」^{『広島県勸業年報』明治十九年度版}程度であったものが、明治二十年代に入って、飛躍する。明治二十年（一八八七）に一七・五万本の毛筆生産が、翌二十一年には一挙に五〇〇万本と二八倍にも増加した。その間の事情を、熊野村統計調査表控（明治二十二年）は次のように述べている。

前年ニ対シ大差ヲ生スル以所ハ本年「明治二十一年」ハ販路開ケ事業盛大ニシテ故ト兼業者モ他業ヲ止メ之レヲ専業トナシタルヨリ斯ル差ヲ見ルニ至レリ

第七章 熊野の筆

西京、東京」(明治二十六年)、「九州、四国、中国、大坂、東京、其他全国内」(同二十七年)、「九州、四国、中国、山陰、大阪、名古屋、東京、其他全国内」(同二十八年)とあり、それ以降「全国」とされている。これらの記述からも、当時の熊野筆の販路の拡がる様子がうかがえよう。少し後の熊野村統計報告事跡によれば、次のような状況についての記録も残されている。

筆製造益々繁盛ニ極メ近時原料之価額騰貴セシ職工増加シ随事之販路モ拡張シ全国輸出セリ(明治三十二年)

筆製造日々繁栄ヲ極メ依テ其販路ハ全国ニ輸出セリ(明治三十三年)

3 熊野村輸出入年報

にみる熊野筆の販路

(明治期)

明治二十年代から三十年代にかけての熊野筆づくりの体制が確立してゆく時期と思われるころの、熊野村からの県内ならびに全国各地に向けて出荷される筆の様子は、「熊野村輸出入年報」に

輸出入

明治二十年代から三十年代にかけての熊野筆づくりの体制が確立してゆく時期と思われるころの、熊野村からの県内ならびに全国各地に向けて出荷される筆の様子は、「熊野村輸出入年報」に

* 対を倍にして本に換算

図7-1-18 熊野筆の輸出
「熊野村輸出入年報」各年より

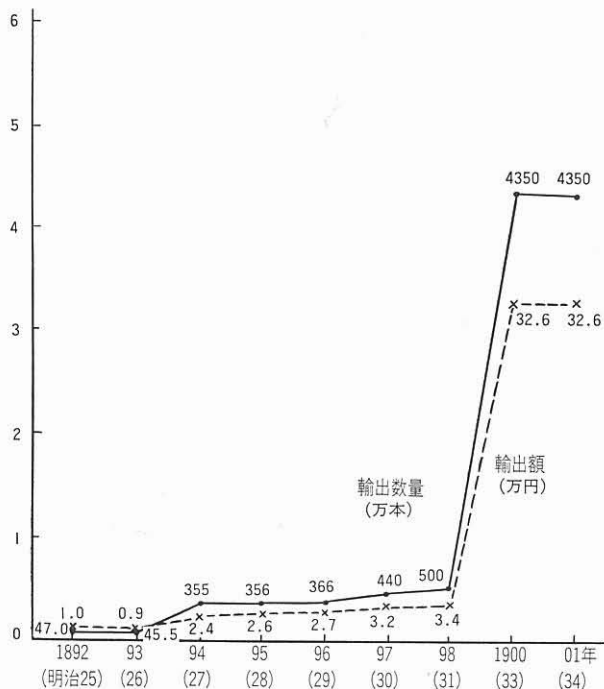


表7-1-4 毛筆および同関連資材の輸出入

(円)

	輸 入		輸 出	
明治25年	筆 毛 3,600 (20.2)	小計 6,445 (36.2)	毛 筆 10,830 (50.0)	小計 13,510 (62.4)
	軸 245 (1.4)		墨 2,680 (12.4)	
	墨 2,600 (14.6)		計 21,640(100.0)	
	計 17,814(100.0)			
26	筆 毛 2,000 (14.8)	小計 4,421 (32.8)	毛 筆 9,932 (59.2)	小計 12,532 (74.6)
	軸 121 (0.9)		墨 2,600 (15.5)	
	墨 2,300 (17.1)		計 16,790(100.0)	
	計 13,469(100.0)			
27	筆 毛 1,856 (7.4)	小計 4,926 (19.5)	毛 筆 24,843 (77.5)	小計 27,243 (85.0)
	軸 670 (2.7)		墨 2,400 (7.5)	
	墨 2,400 (9.5)		計 32,065(100.0)	
	計 25,210(100.0)			
28	筆 毛 1,858 (5.8)	小計 5,328 (16.8)	毛 筆 26,921 (51.6)	小計 29,341 (56.3)
	軸 970 (3.1)		墨 2,420 (4.6)	
	墨 2,500 (7.9)		計 52,151(100.0)	
	計 31,797(100.0)			
29	筆 毛 2,550 (6.3)	小計 6,250 (15.5)	毛 筆 27,457 (47.0)	小計 29,897 (51.2)
	軸 1,200 (2.9)		墨 2,440 (4.2)	
	墨 2,500 (6.2)		計 58,375(100.0)	
	計 40,335(100.0)			
30	筆 毛 3,250 (10.2)	小計 7,150 (22.4)	毛 筆 32,300 (80.6)	小計 34,520 (86.1)
	軸 1,900 (5.9)		墨 2,220 (5.5)	
	墨 2,000 (6.3)		計 40,081(100.0)	
	計 31,981(100.0)			
31	筆 毛 4,500 (14.2)	小計 7,385 (23.4)	毛 筆 34,000 (71.2)	小計 36,220 (75.9)
	軸 885 (2.8)		墨 2,220(4.7)	
	墨 2,000 (6.3)		計 47,720	
	計 31,596(100.0)			
33	筆 毛 5,287 (11.7)	小計 18,277 (40.6)	毛 筆 326,550(85.6)	小計 326,550(85.6)
	軸 12,990 (28.9)		墨 —	
	墨 —		計 381,292(100.0)	
	計 45,008(100.0)			

34	筆毛 5,287 (10.7) 軸 12,990 (26.3) } 18,277 (37.0) 計 49,355(100.0)	毛筆 326,250(85.9) 計 379,652(100.0)
35	筆毛 5,287 (10.8) 軸 12,990 (26.6) } 18,277 (37.4) 計 48,874(100.0)	毛筆 326,250(87.5) 計 372,842(100.0)

「熊野村輸出入年報」(表)より

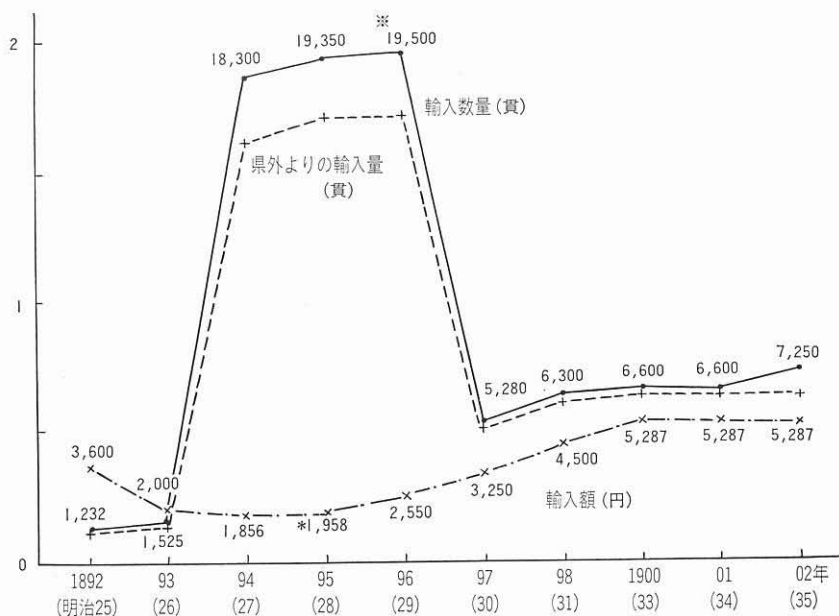


図7-1-19 筆毛の輸入

「熊野村輸出入年報」より

※ 4,200となっているが19,500の計算の誤りか？

* 1,958となっているが 1,858の計算の誤りか？

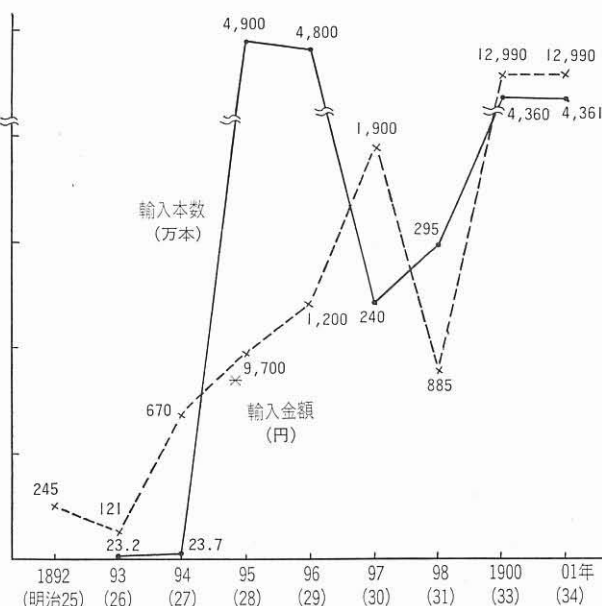


図7-1-20 筆軸の輸入
「熊野村輸出入統計年報」より

* 970円の誤りか

よって知ることができる。明治二十六年までは数十万本で一万円程度まで、明治二十七年から同三十一年までは数百万本で二〜三万円程度の輸出であった。それ以降、一挙に四〇〇〇万本で三十数万円の輸出となっている。このうち、大体県外向けは八割以上を占めている。

原材料の調達

毛筆製造にとって、もっとも重要な原料である筆毛の調達はどこからなされていたのか。地元での調達は不可能であったから、県内外の各地から輸入されていた。県内では、賀茂、佐伯、

三次、三谷、安芸、双三の各郡から、県外では、九州、四国、島根、山口、大阪、奈良、神戸方面から入手されていたが、圧倒的な部分は県外からの輸入にたよっていた。その様子は、図7-1-19に示されている。記録によると日清戦争の時期に異常に多くの量の筆毛が輸入されている。しかし、金額は、その前後の年とほとんど大差ない。どのような事情によってこのような数値になったのかは、よくわからない。

つぎに、筆軸についてはどうであったか。筆軸も、筆毛と同様、県内外からの輸入にたよるをえなかった。県内から

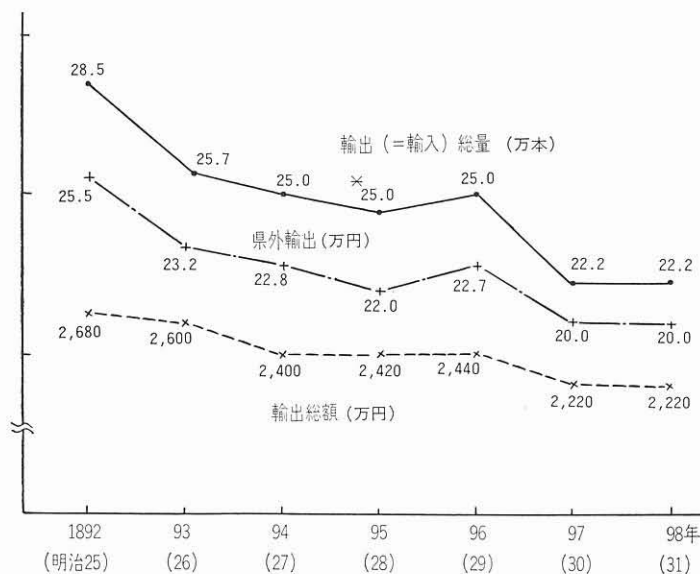


図7-1-21 墨の輸出入

「熊野村輸出入統計年報」より

輸入量と輸出品（県内各地宛含む）は大体同量

* は24.3の誤まりと思われる。

は、佐伯、高宮の両郡から、県外からは、大阪、岡山、長崎の各方面からであったが、大部分だいたい九割近いものは県外からのものであった。その状況は、図7-1-20に示されている。明治二十七年から同二十九年の数値については、若干の疑問が残るところではあるが。

また、一時期とは思われるが、毛筆に関連して墨の輸入販売がなされていたようである。輸入は、もっぱら大阪、奈良方面からなされ、それらが、九州、四国、山陰各地に輸出されていた。輸出価値と輸入価値とがほとんど等しく、年によっては逆鞘（ぎやくさや）となっているところからみても、おそらく、墨は毛筆販売促進のために付随したいわば「奉仕」活動の域をあまりでなかったもののように思われる。その後、墨の取り扱い量は、減退し統計からも

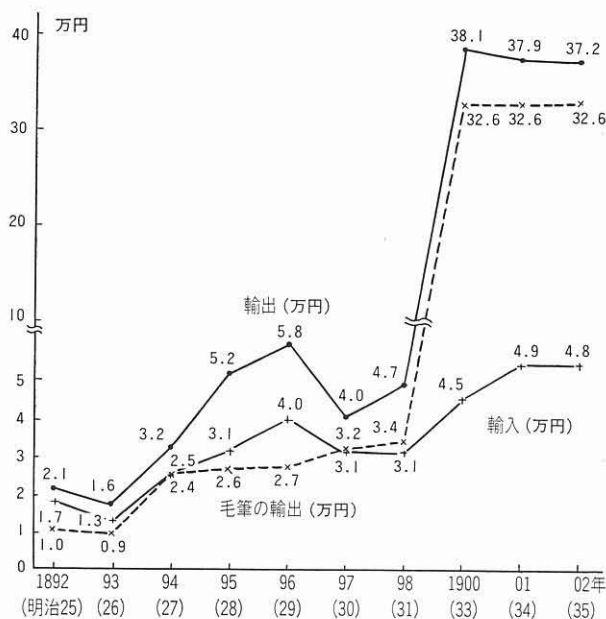


図7-1-22 熊野村の輸出入
「熊野村輸出入年報」(表) 各年より

熊野村の産物や製造品の輸出入は、毛筆関係を除けば、これといって特異なもの
は存在しない。図7-1-22によれば、明治三十一年ごろまでは、数万円規模の
輸出入があり、筆造りの盛んとなる明治三十年代の前半ごろからは輸出が急増している。もちろん、熊野村の輸
出の全体的動向は、毛筆製造の推移によって規定されている。毛筆および同関連製品(筆毛、軸、墨)の輸出入の
動向と、それらが熊野村の輸出に占める割合
が、図7-1-23と図7-1-24に示されて
いる。輸出については、主に毛筆および若干
の同関連製品が常にその過半を占め、多い年
には全体の九割にもせまる勢いである。それ
にたいして、輸入の面では、毛筆関連のそれ
はたかだか四割、大体一―三割程度であつ
た。日常生活用品その他こまごまとしたもの
の輸入をまかなって、全体として、筆産業に
よる出超が続いたということである。筆の都
熊野は、この面からも、文字通り筆によって
支えられてきたことが、より明らかとなるで
あろう。

姿を消している。

輸出入にしめる毛筆の比重

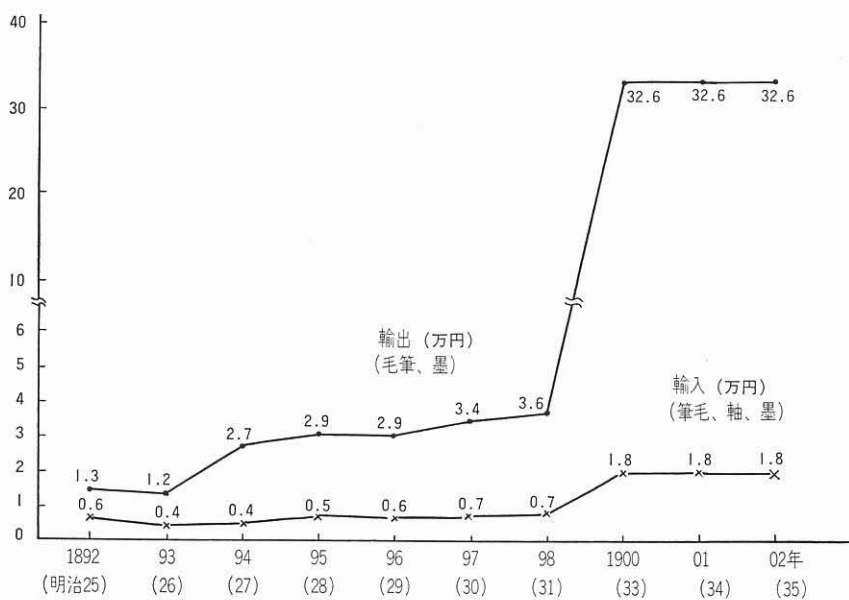


図7-1-23 熊野筆に関連する輸出入

「熊野村輸出入年報」(表) 各年より

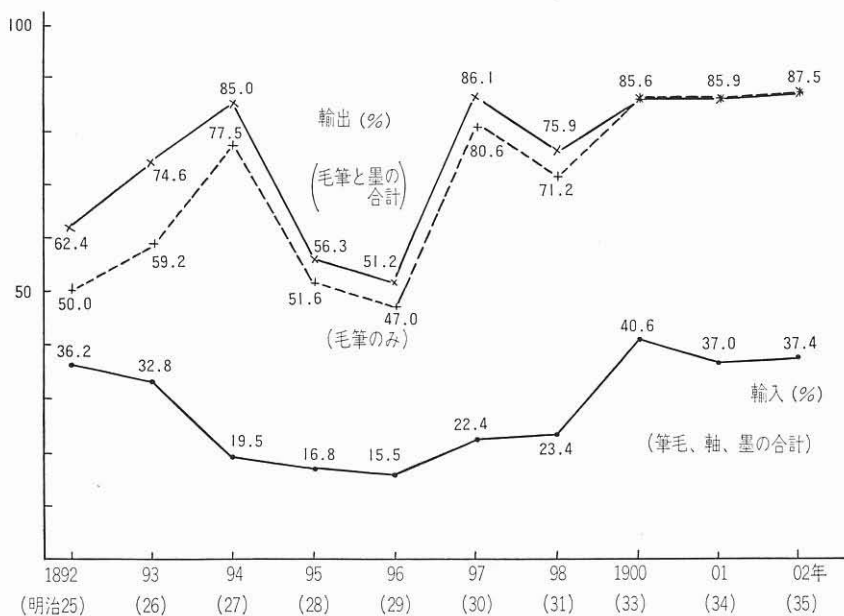


図7-1-24 熊野村の輸出入における筆関係の割合

「熊野村輸出入年報」(表)より

四 近・現代における熊野筆(Ⅲ)

——広島県下の筆生産量の移り変わりと熊野筆——

広島県勧業統計表

広島県内での毛筆の生産は、戦後においては、熊野町と川尻町でのみみられる。両町は、単に、県下における二大産地であるばかりでなく、愛知県豊橋市や奈良市と並んで、全国的な生産地である。ところで、このような両町への毛筆生産の集中は、歴史的にはいつごろから、みられるようになったのであろうか。

「広島県勧業統計表」によれば、その様子をほぼ類推することができる。すなわち図7—1—25および同7—1—26によると、明治十九年（一八八六）から昭和十年（一九三五）までの、年ごとの広島県内における熊野筆の生産とその県内にしめる比重とが、分かる。安芸郡には、焼山村（昭和六年呉市へ合併）における毛筆の生産も含まれているが、それはごく少量である。

熊野における毛筆の生産は、県内の毛筆生産が盛んとなる明治の二十年代から、圧倒的なシェアを占めている。毛筆の生産量では、この間最高八〇〇〇万本（四〇〇〇万対）にせまる生産量が記録されている。県下にしめるその比重も常に七割以上、大体九割前後のところを上下している。

毛筆生産の額では、全国的に慢性的不況の時期（明治四十年ごろから大正四年ごろ）と、第一次世界大戦（大正三年—同七年（一九一四—一八））ののちの戦後恐慌以降の慢性的不況状況下、昭和恐慌（昭和五年（一九三〇）開始）にいたる間に、大きな落ち込みがみられるが、全体としては伸びている。ただ、広島県内にしめる熊野筆の生産額

{ * 1903 (明治36年) ~ 1921 (大正10年) 単位(対)は(X2)で
1929 (昭和4年) ~ 1935 (昭和10年) [本]に換算して記す }

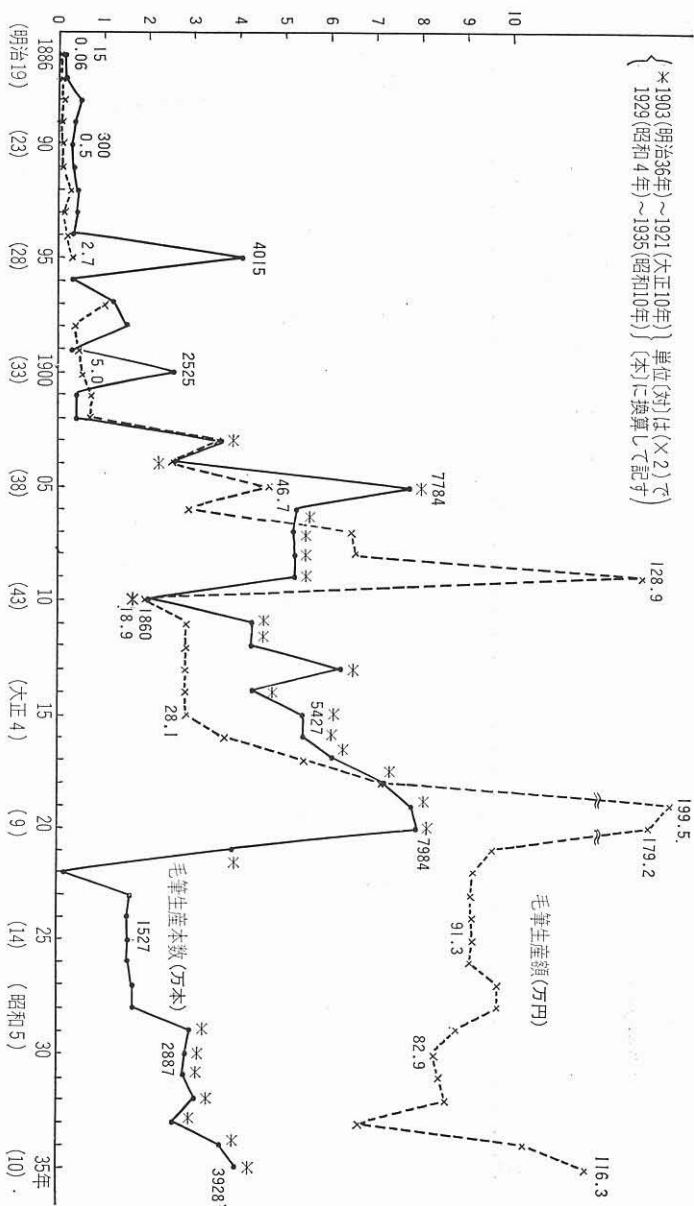


図 7-1-25 熊野村 (安芸郡) の毛筆生産本数及び生産額

『広島県勲業統計』より作成